

[成果情報名]イチゴ「ゆめのか」における年内収量増収に効果的な夜冷短日処理開始時期

[要約]イチゴ「ゆめのか」における夜冷短日処理は、開始時期が早いと処理期間は長くなるが、出蕾、開花、収穫開始が早まり、年内収量は向上する傾向となり、8月下旬までは処理の早進効果が高い。

[キーワード]イチゴ、ゆめのか、夜冷短日処理

[担当]長崎県農林技術開発センター・農産園芸研究部門・野菜研究室

[連絡先](代表) 0957-26-3330

[区分]野菜

[分類]普及

[作成年度]2014年度

[背景・ねらい]

長崎県の主要園芸品目であるイチゴは、「さちのか」から多収性の「ゆめのか」への転換を図っている。「ゆめのか」は収量性に優れるが、頂花房の花芽分化が「さちのか」以上に遅く、年内収量確保が難しいため、8月下旬処理開始の夜冷短日処理により頂花房の安定した花芽促進効果が得られることを明らかにし(2013 成果情報)、作型の一部として普及している。

今後は栽培面積拡大が予想されるが、作型の分散による安定生産技術の構築が必要となる。そこで「ゆめのか」における夜冷短日処理開始日の違いが頂花房の花芽分化及び出蕾、開花、年内収量に与える影響を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

1. 「ゆめのか」の夜冷短日処理による頂花房の花芽分化は、処理開始時期が遅いほど短期間で進む傾向がある(図1)。
2. 夜冷短日処理では、処理開始時期が早いほど定植日、出蕾日、開花日、収穫開始日が早くなり、年内収量は向上する傾向となり、8月26日までの処理効果が高い(表1)。

[成果の活用面・留意点]

1. 「ゆめのか」における夜冷短日処理開始時期の目安として活用できる。
2. 2013年、2014年は、普通ポット育苗の花芽分化が平年より、3～5日早い条件での試験結果である。
3. 本試験に用いた夜冷庫内における処理期間中の18:00～8:00までの平均気温は2013年(8/5～9/16)が18.9℃、2014年(8/5～9/17)が16.0℃であった。
4. 夜冷短日処理は施設の冷房能力により、効果が変動することが考えられるため、頂果房の花芽分化を確認するまで処理を続ける。
5. 夜冷短日処理を早くから開始すると年内収量が向上するが、着果負担が早くから大きくなるため、温度管理、電照管理、摘果、追肥等により草勢維持管理に努める必要がある。

[具体的データ]

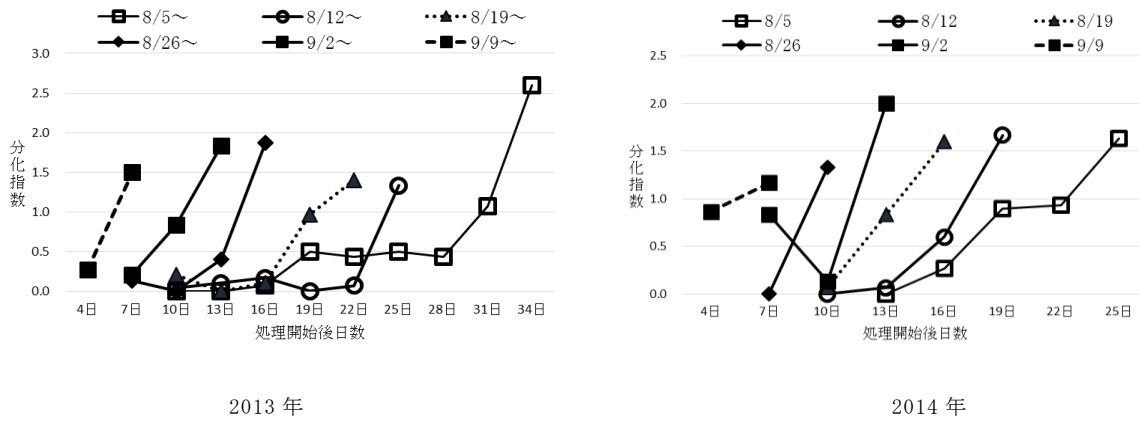


図1 イチゴ「ゆめのか」における夜冷短日処理開始日の違いによる花芽分化の推移

表1 イチゴ「ゆめのか」における夜冷短日処理開始日の違いによる定植日及び出蕾日、開花日、収穫開始日、年内収量

試験年次	処理開始日	定植日	出蕾日	開花日	収穫開始日	年内収量 kg/a
2013年	8/5	9/9	10/4±1	10/13±1	11/12±1	204(185)
	8/12	9/9	10/5±1	10/14±1	11/14±1	214(195)
	8/19	9/12	10/9±1	10/19±1	11/19±3	180(164)
	8/26	9/12	10/10±1	10/21±1	11/23±2	171(155)
	9/2	9/15	10/14±1	10/26±2	12/3±3	138(125)
	9/9	9/16	10/14±1	10/27±1	12/5±3	134(122)
	無処理	9/16	10/16±1	10/29±1	12/8±2	110(100)
2014年	8/5	9/1	9/28±2	10/9±2	11/7±3	166(231)
	8/12	9/1	10/3±2	10/14±1	11/13±2	150(208)
	8/19	9/5	10/7±5	10/19±5	11/16±2	149(207)
	8/26	9/7	10/8±1	10/21±1	11/22±2	133(185)
	9/2	9/15	10/14±1	10/27±1	12/1±3	90(125)
	9/9	9/17	10/17±1	10/31±1	12/10±3	64(88)
	無処理	9/16	10/16±1	10/30±1	12/7±3	72(100)

※±は95%信頼区間の幅、()内数字は各年の無処理比率(%)

○耕種概要

(2013年)

育苗—高設雨除け育苗、2013年6月10日ランナー切り離し、施肥量N-200mg/株
本圃—長崎県型高設栽培、施肥量N-16.6kg/10a

(2014年)

育苗—高設雨除け育苗、2014年6月10日ランナー切り離し、施肥量N-200mg/株
本圃—長崎県型高設栽培、施肥量N-16.6kg/10a

[その他]

研究課題名：イチゴ次期有望品種「ゆめのか」の安定生産技術の確立

予算区分：県単

研究期間：2013～2015年度

研究担当者：前田 衡